

要 旨

絵本が地域にもたらすものは何か

—絵本によって開かれる可能性を探る—

井 上 良 子

はじめに

社会の未来をになう子ども達に、豊かな人間に育ってほしい、これは万人の願いである。社会の豊かさ、発展は生きる人々の心の中に潤いを持たせるものでなければならない。2001年子ども読書推進法施行とともに社会活動として、こどもに本を読む活動が広がった。

本研究の目的は、人間にとって絵本とは何かを問うことであり、絵本を媒体にして読み手と聞き手の間に開かれていく関係性が、社会においてどのように有効な素地を形成しているのか、また読み手自身の内発性に関して明らかにすることである。こどもを育む地域が本によって開かれていく可能性を探る。

第1章 「読み聞かせ」をめぐる社会状況と先行研究

第1節 地域におけるこども達の社会状況

私は地域で草の根的に互いの感性を磨く事を目的にしてアトリエを開いてきた。いつの時代にも環境は変わって行くものである。近年、こども達とゲームとの関係が深まり、機械が提示する事柄に対応していくなかで達成感を増し、よい結果が生じれば、気持ちが高揚する。しかし、気持ちにそぐわない結果になるとイライラ感が増長する傾向にある。一方で実態のある日常生活から生まれるイライラはゲームをすることで解消され、気分転換になり、今後ますますゲームはこども達との関係を深めていく事になるであろう。こども達は遊ぶことで心を躍らせ、創造性を育て、社会性をも自らの中に身につける。

しかし、機械は人を何処まで育てられるのであろうか。人間は人と人の中だけでしか人間らしく育たないのではないかという思いが私の中にはある。人間の関係性を深めるための有効な媒体のひとつが「絵本」である。絵本を読む時、声は穏やかな波になり、心地がよくなる。人は絵本によって豊かになる。信頼や安心感も絵本を読み聞く過程で生まれてくると考える。

第2節 「読み聞かせ」の高まりと実態

文部科学省の調査では、2009年において全体の94%の小学校が「読み聞かせ」を実施しており、地域ボランティアの関わりは、全体の76%に及んでいる。

① ブックスタートについて

枚方市は2009年に保育園で1才のお誕生月にブックスタートを施行した。

松居直氏に枚方市に関して次のように述べた。「1歳からでは遅い。母国語は知らず知らずのうちに体に入る。保育士が絵本を解っていない。社会的な課題である。」お母さんの幸せなくしては、こどもの幸せはない。心の通じ合う人間関係が社会全体に広がる事が重要であり、家庭の安定と地域社会の活性化とを実現するために、全国一律の方法では弊害が生じるおそれがある。また大学の

保育課程で絵本を学ぶ機会はないのが現状である。実社会において保育士や、幼稚園の教諭が絵本の指導者の役割を強いられている。

② 中学生を主体としての活動について

中学生が小学生や園児を対象に活動を行っている。卒業後の高校生も自主的に活動を深め、原動力となり、後輩の育成に積極的に関わっている。広い年齢層の市民が関わる事は地域の養育力を高め、「顔の見える」安心した社会の形成に繋がる。

またよい絵本は循環する。若い人々が自己の育ちの中で体感した絵本への思いは、将来自らがこどもを産み育てる立場になった時、有意義に働きかけることになるだろう。

③ 子育て支援の一環について

赤ちゃんと母親への子育て支援活動は、「絵本で子育て」として実施されている。また母親も絵本に触り、声に耳を傾けている。読み手と聞き手を繋いでいるのは絵本であり、行きかうものは声である。声の響きや声の色が広がり、生活の中から生まれた重みと響きがある。

④ 小学校への関わりについて

朝学習や図書の時間にボランティアとしてPTAや地域人が活動している。こども達が他者との関わりを持つ上においても絵本は重要である。こども達は最近多発する凶悪な事件などにより、大人や知らない人を不審者としてみる環境の中で生活している。

「読み聞かせ」は共に同じ体験をする。授業中立ち歩く児童やヤンチャな生徒が「読み聞かせ」の際は静かに座って聞くことが多い。「読み聞かせ」により読み手とこどもを結ぶ時間や場が生まれる。

図書ボランティアは、司書教諭との連携が大切であり、専門性を必要とする事の認識を持つ必要がある。

第3節 「読み聞かせ」の先行研究と検討

これまでの先行研究は、保育や教育の立場から、論じられた物が多い。私は、人間の成長は一方向に進むのではなく、年輪であり年を重ねても自らの内側に「こども」の面を内包していくと考える。「読み聞かせ」を行う人々はこの内なるこどもの存在と常に向き合っているのではないか。現在の生き苦しいともいえる社会の中で、地域社会において絵本の可能性について検討した。

第2章 絵本の定義

第1節 「読み聞かせ」の場の絵本の定義

絵本を「読み聞かせ」する時には、読み手、聞き手、絵本が必要になる。「読み聞かせ」における絵本は、言葉（文・ポエジー）＋声（生命性）＋美術（絵・抽象性）によって構成される。

第2節 絵本の形態・かたち・身体性

紙の形態として、漫画は一人で読まれ、コミュニケーションは、読後の感想を話し合うことで事後的に成立する。紙芝居は、一人芝居であり、演出者と観客との間に関係性が生まれる。絵本は同じ側の視点により読み進めることができ、共に目で見、耳で聴く事の出来る総合芸術である。

第3章 絵本と「読み聞かせ」の歴史

第1節 日本における絵本の歴史

世界で最も古い絵本は、奈良絵本と呼ばれ、絵巻物をルーツとしている。

日本の近代における富国強兵政策の中で絵本が利用される時代を経て、現在は年間2000冊が出版される絵本大国である。

第2節 「読み聞かせ」活動の歴史

大正時代に児童芸術家運動として教師によって始まり、今日ではボランティア活動が普及している。

第4章 「読み聞かせ」活動者に対するアンケート調査と分析

第1節 「読み聞かせ」の実態とこどもの環境

活動者は5年未満の人が多く、小中学校の朝学へは50%に近い。こどもは小学校入学までにゲームをする環境にある。成人の体験は本よりも人を覚えている。

第2節 活動者の実情と内発性及び今後の課題

我が子が成人しても活動を続けたいと思う人が47%おり、読む喜びを感じている人が多い。活動以外の本を読まない人もある。

第3節 「読み聞かせ」という名称の問題点と絵本と声のとりえ方

不快に思う人が50%おり、肯定をする人は2%である。理由として強制的、命令的、一方的というものであり、何とも思わないは経験の浅い人も多数いる。

第4節 地域社会における「読み聞かせ」の内発性と役割

絵本を読むと言う活動は、読み手、聞き手共有し作用する。

第5節 共読み＝ともよみの提唱と活動者のコミュニティの課題

- ①「読み聞かせ」から「ともよみ」への発想の転換
- ②ラーニング・コミュニティにつながる内発性の発展への課題

第5章 地域社会において絵本の「ともよみ」の可能性

第1節 神話的時間の構築について

神話的な時間の中に身をおく事が人間を深め、そこに文学、聖書、経を読む鍵がある。女性が子育てを行っているが、男女共に、こどもが育つ中で神話的時間を共有することが重要である。

第2節 絵本の「ともよみ」でかける平和へのかけ橋

各国絵本を「ともよみ」することは平和への道となる。「聖書でなく、こどもの本を持っていくんだよ」これはケストナーの言葉である。平和学習のみならず、絵本の中で得た楽しい経験は、神話の時間が満ちた国に対して銃を構えようとは誰も思わない。絵本が平和のかけ橋になると考える。

まとめにかえて

絵本を共に読むことを「ともよみ」として提唱していきたい。絵本は幼い人も読むことが出来、大人も共に読むことのできる「人間」のための本である。

足元の揺らぐ、豊かな日本にいて、物質の豊かさにかえて幸せが見えにくい。人の幸せは何か。本当に大切なものはお金では買うことが出来ない。お金本位の豊かさを指標とするのではなく、循環性のあるものに関わりを持ち、内発的に成長していくことが重要である。

絵本は世代を超えて読み継がれ、「ともよみ」は繋がり縦軸の循環にもなり、横軸の同じ時間と空間を共有する繋がりになる。共感し、共にする体験は、これから人生を生き抜くこどもにとって大いなる力になるであろう。

生命系の本質は循環性の永続である。今、先進国は少子化の問題をはらんでいる。異性と家庭を持ち、こどもを産み育てる事が困難な風潮である。

個の自由、幸福感、また、経済の観念において、生活を脅かすものがこどもであると捉えられている社会風潮であるともいえる。

機械に接する事が多くなったこども達は人との関係が億劫になり、苦手意識や、制覇しやすい機械との間柄を好む環境を大人が作ってはならない。

私たちは機械ではなく生身の人間である。人と人の中に生きる温かさを絵本を通じて伝えていきたい。こどもが育つためには絵本だけが重要ではない。野外に出て遊ぶことも望まれる。今日こどもの安全を守ることが優先され、野外になかなか出られない状況において、絵本を「ともよみ」する時間を体験することが昔にも増して必要になった。

私は、絵は心を育てると確信している。絵本は暮らしの中でこどもたちの身近な美術館でもあり、絵本を読む時、声は穏やかな波になり深い共感で繋がる。また、かつてこどもであったことを忘れてしまった大人達のためにも「ともよみ」は意味のあることである。

行政刷新会議で切り捨てられた「こども達に絵本を読む活動」が社会にとって、価値あるものという認識が人と人の間に、乾いた砂が水を吸うように、浸透していく事を願っている。出版される絵本がこども達にとって血肉になるものとして、一級の芸術品であることを創作者また出版社へ切に願いたい。